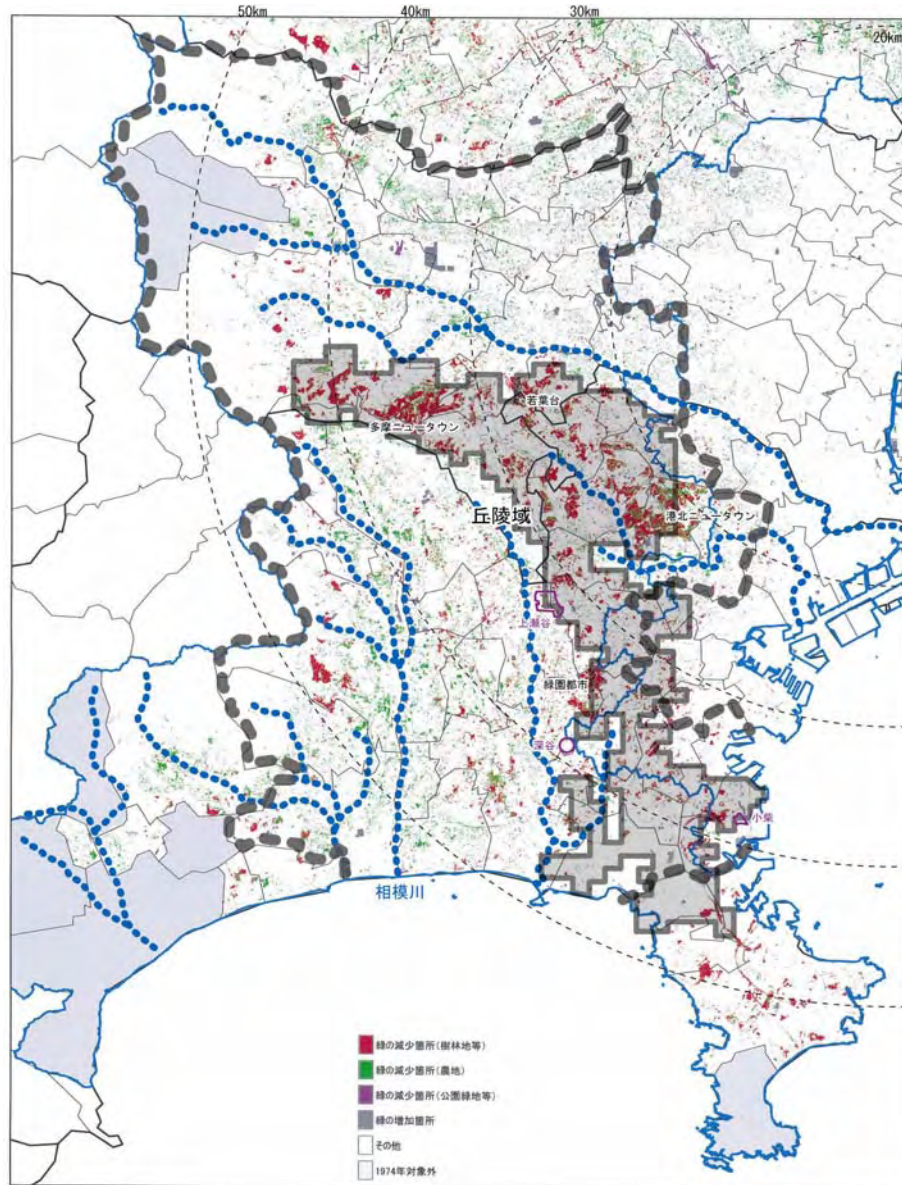


§ 2 首都圏南西部の水と緑の現状と課題

1. 緑の減少状況

- ・過去40年間に、横浜市、川崎市の緑（樹林地）は、面積が約3分の1にまで減少した。（八都県市資料：2003年）
- ・過去20年間の即地的な減少状況を見ると、樹林地の減少は丘陵域（特に北側）において顕著であり、大規模に消失してきている。一方で、農地の減少は、それぞれが小規模ながらも全域（特に相模川沿川）にわたって消失してきている。
- ・このように、これまでの首都圏では、郊外部での緑の分断化・断片化・孤立化の傾向が見られ、都市の個性を形づくる地形や水系、文化・歴史的痕跡等が消失されているとともに、ヒートアイランド現象緩和などの都市環境負荷調整や、生物多様性の確保の面からも問題が見られる。

■ 首都圏南西部
に
おける過去20年
間(1974-1994)
の緑の減少状況

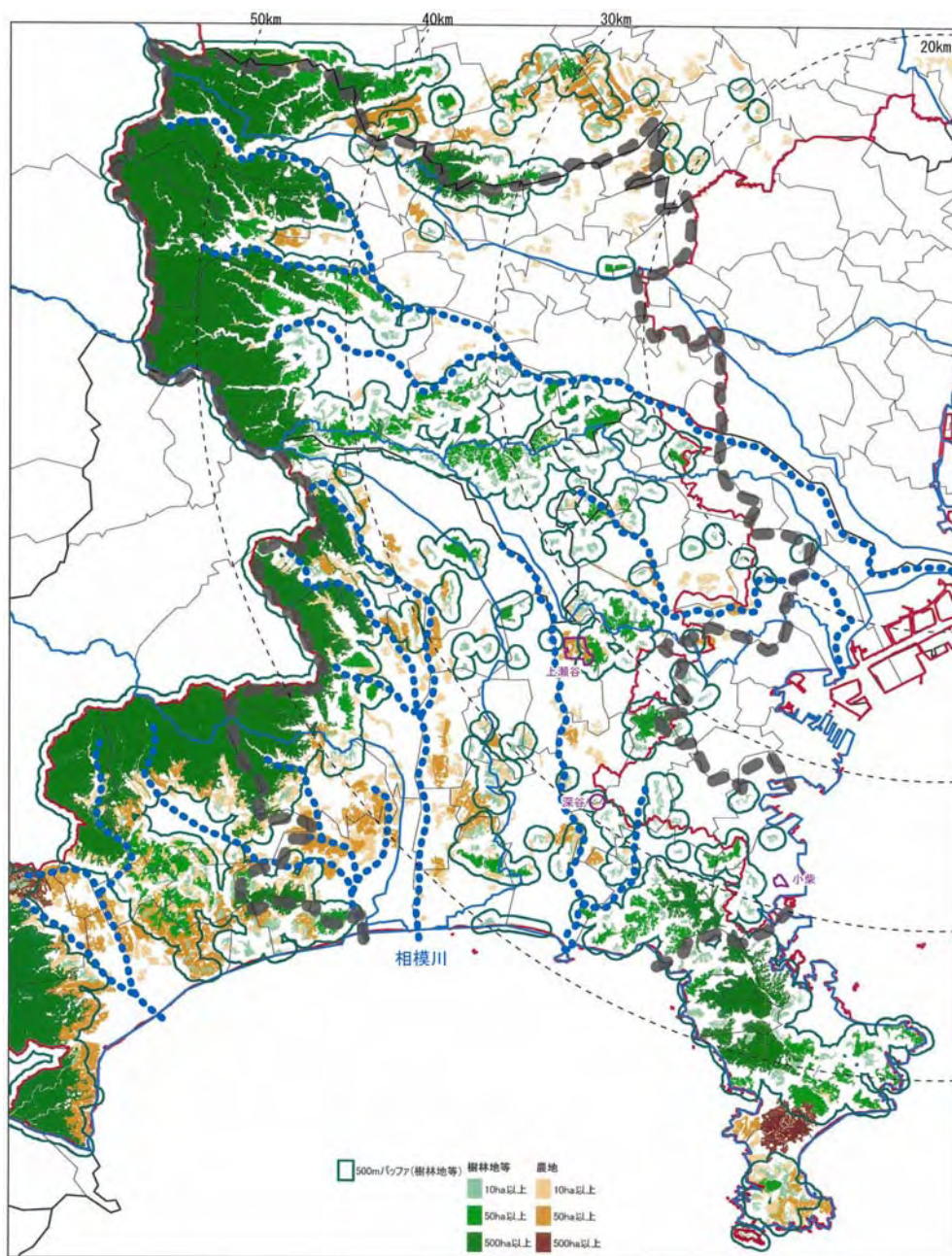


(国土地理院細密数値情報：1974年、1994年)

2. 緑の規模と連担性

- 首都圏郊外部の丘陵域では、樹林地と農地が混在しつつ大規模な緑地を形成している。それぞれは分断化が進み、飛び石状となっているものの、現在でも相互の連担性は依然高く、ヒートアイランド現象緩和等の都市環境負荷調整等の面から、既成市街地と比較して良好な生活環境を提供している。
- その中で、「上瀬谷」、「深谷」、「小柴」の各施設は、丘陵グリーンベルトの要諦をなす位置に立地しており、環境再生、市街化分節化に向けての牽引的な機能を果たす「種地」「拠点」として有効に活用していくことが考えられる。

■ 首都圏南西部における 10ha 以上の大規模な緑と連担性(500m バッファ域)

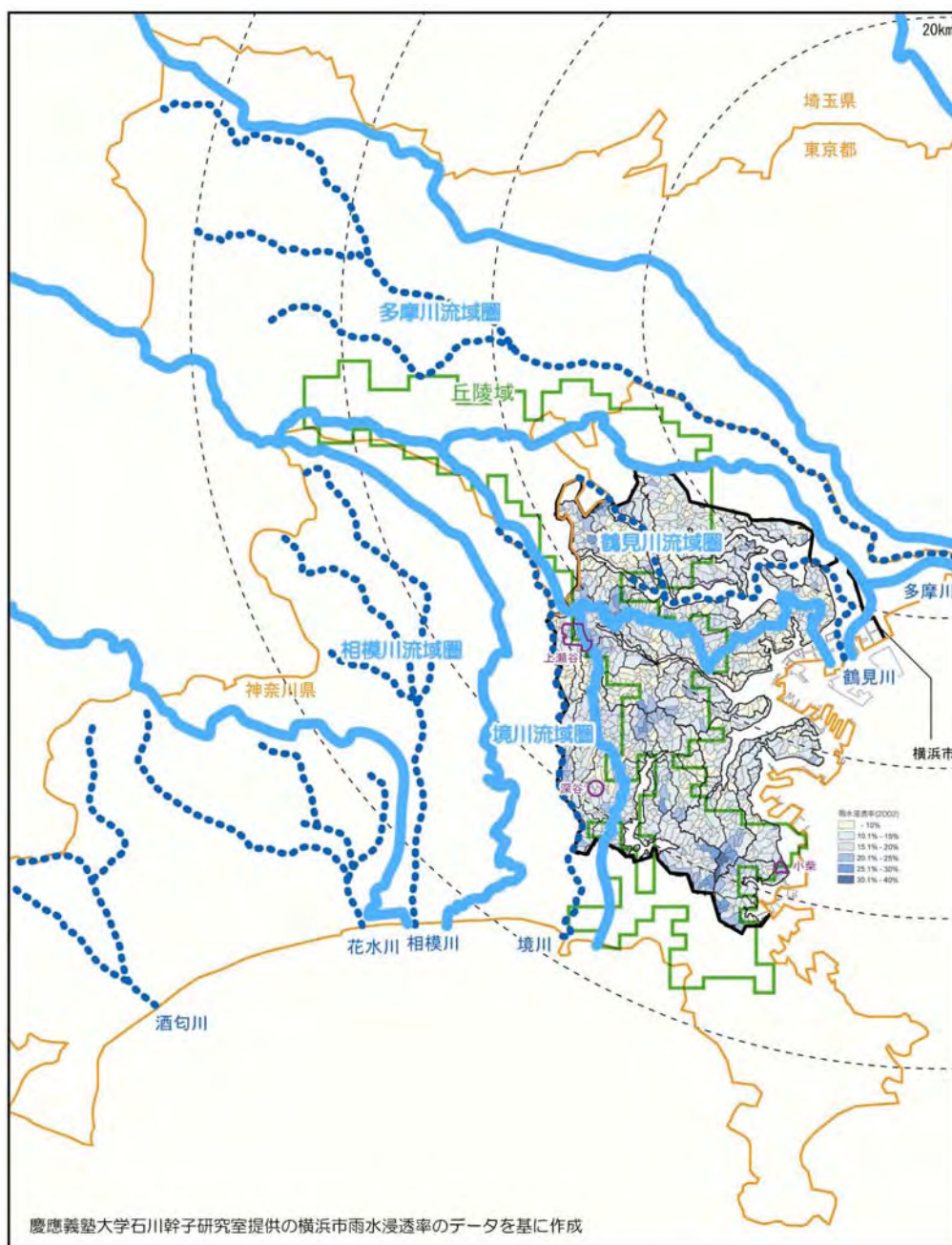


(国土地理院細密数値情報：1974 年、1994 年)

3. 流域圏と水循環（雨水浸透）の状況

- ・「上瀬谷」「深谷」は、境川流域圏に立地し、かつ丘陵域の西側縁辺に位置している。いずれも大規模なグリーンフィールドであり、境川の水循環を考える上で、重要な役割を有している。
- ・「小柴」については、かつての海岸線に立地しており、流域という観点からの位置づけは低いが、水循環の視点で考えると、台地の端に位置する崖地であることから重要な役割を有している。

■ 首都圏南西部における流域圏と横浜市域の雨水浸透率の状況

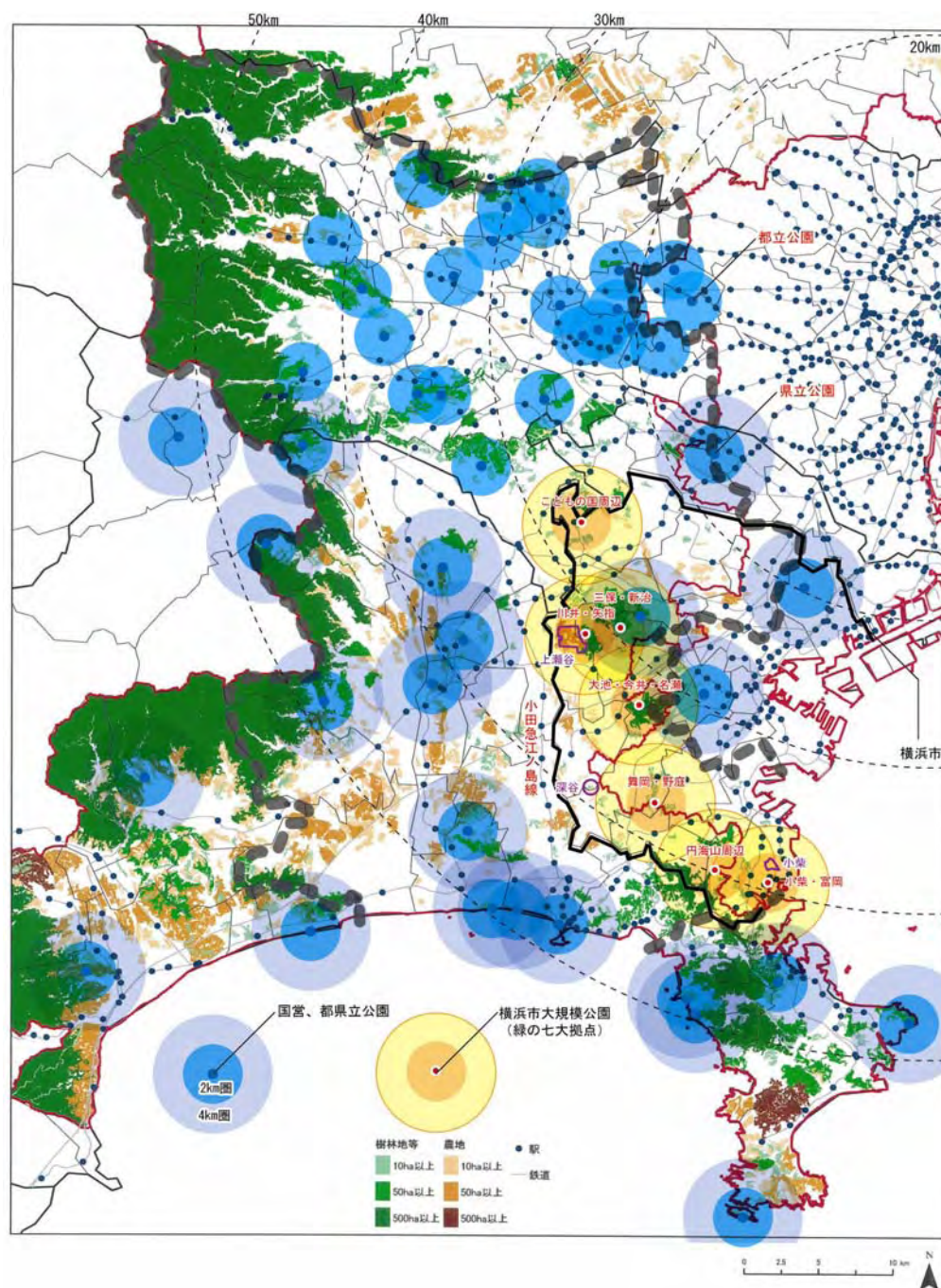


(慶應義塾大学石川幹子研究室提供データ)

4. 緑のレクリエーション拠点の充足状況

- ・「上瀬谷」「小柴」は、横浜市が優先的な緑の保全と創出を図る拠点として位置づけている、「緑の七大拠点」に含まれる拠点の中央部に立地し、この保全を図る上で、重要な役割を有している。
- ・「深谷」については、緑の七大拠点の空白地である、横浜・藤沢の両市境近辺に位置し、現在、利用拠点の充足度が低い地域一帯の充足度を高めるために重要な役割を有している。

■ 首都圏南西部における緑の大規模なレク利用拠点の充足状況



5. 緑の担保状況

- ・首都圏南西部では、都市施設としての公園緑地や首都圏近郊緑地保全区域等の様々な地域制緑地の指定により、緑の保全のための方策が実施されている。
- ・その中で、「上瀬谷」、「深谷」については、市街化調整区域（上瀬谷では一部農用地区域）として、また「小柴」については加えて風致地区としての開発規制が担保される他、緑地保全のための特段の方策が整備されていない現状にある。

■ 首都圏南西部における緑の担保状況



出典：「八都県市緑の『知る・見る・歩く』マップ」（八都県市首脳会議。平成16年11月）

6. 緑の保全・活用に向けた広域的取り組み

- ・首都圏南西部における緑の重要な骨格軸を形成する多摩丘陵から三浦丘陵にいたる区域は、その形態的特徴から通称『イルカ丘陵』と称され、都県を越えて、関係市町による広域的な連携の取り組みが積極的に行われつつある。
- ・水の骨格軸である流域においても「鶴見川流域」、「相模川流域」の各地域では、自治体の枠を越えて、市民、企業、行政の連携による取り組みが積極的に進められている。
- ・その一方、上記の骨格軸に挟まれた境川流域は、広域連携による取り組みの空白地帯となっている。

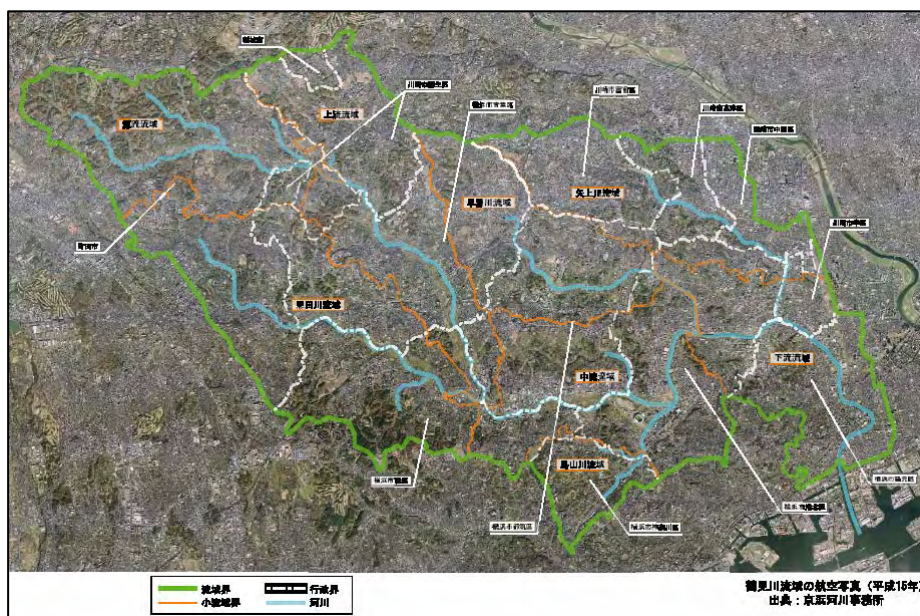
■ 多摩・三浦丘陵(通称:イルカ丘陵)における広域連携の取り組み



出典：『「みどりと友好のシンポ」多摩・三浦のつながりを求めて』シンポジウム資料

- ・ 東京都と神奈川県にまたがる両丘陵域では、都県を越えた 13 市町が連携した「緑の保全と活用」に向けた取り組みが行われている。
- ・ 平成 19 年 2 月 10 日には、『「みどりと友好のシンポ」多摩・三浦のつながりを求めて』と題するシンポジウムが開催されている。

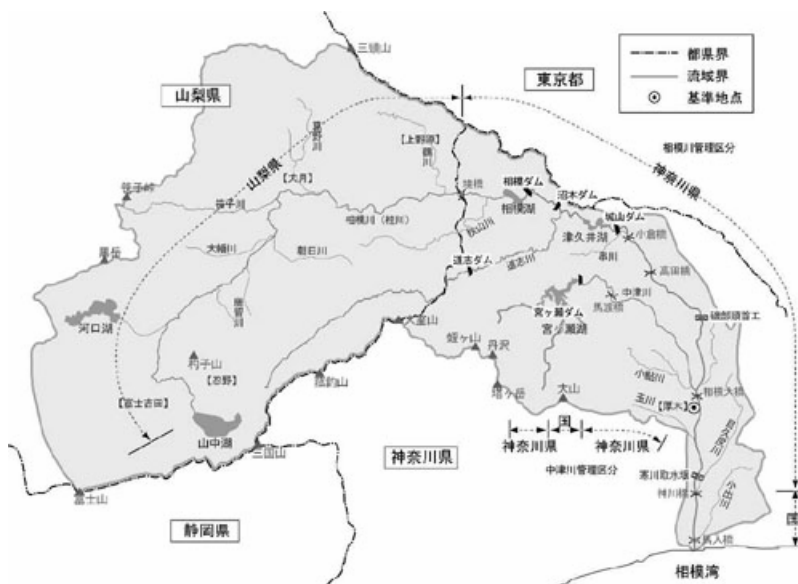
■ 鶴見川流域における広域連携の取り組み



出典：「鶴見川流域水マスタープラン（平成16年8月）」鶴見川流域水協議会

- ・ 鶴見川流域を対象に、流域の市民、企業、行政等が連携して水循環系の健全化を図るための「鶴見川流域水マスタープラン」が平成16年に策定されている。
- ・ 流域規模で連携する流域市民ネットワーク、鶴見川流域ネットワーク（TRネット）が草の根の連携・協働活動を推進し続けてきた。

■ 桂川・相模川流域における広域連携の取り組み



出典：国土交通省河川局ホームページ

- ・ 桂川・相模川流域の市民、事業者、行政のパートナーシップによる水循環保全を目指して、桂川・相模川流域協議会及び4つの地域流域協議会が設置されている。
- ・ 流域の市民、事業者、行政の合意に基づく活動の基本理念である「アジェンダ21 桂川・相模川」が平成11年に策定されている。

7. 水と緑の目指すべき将来像と保全・活用に向けての課題

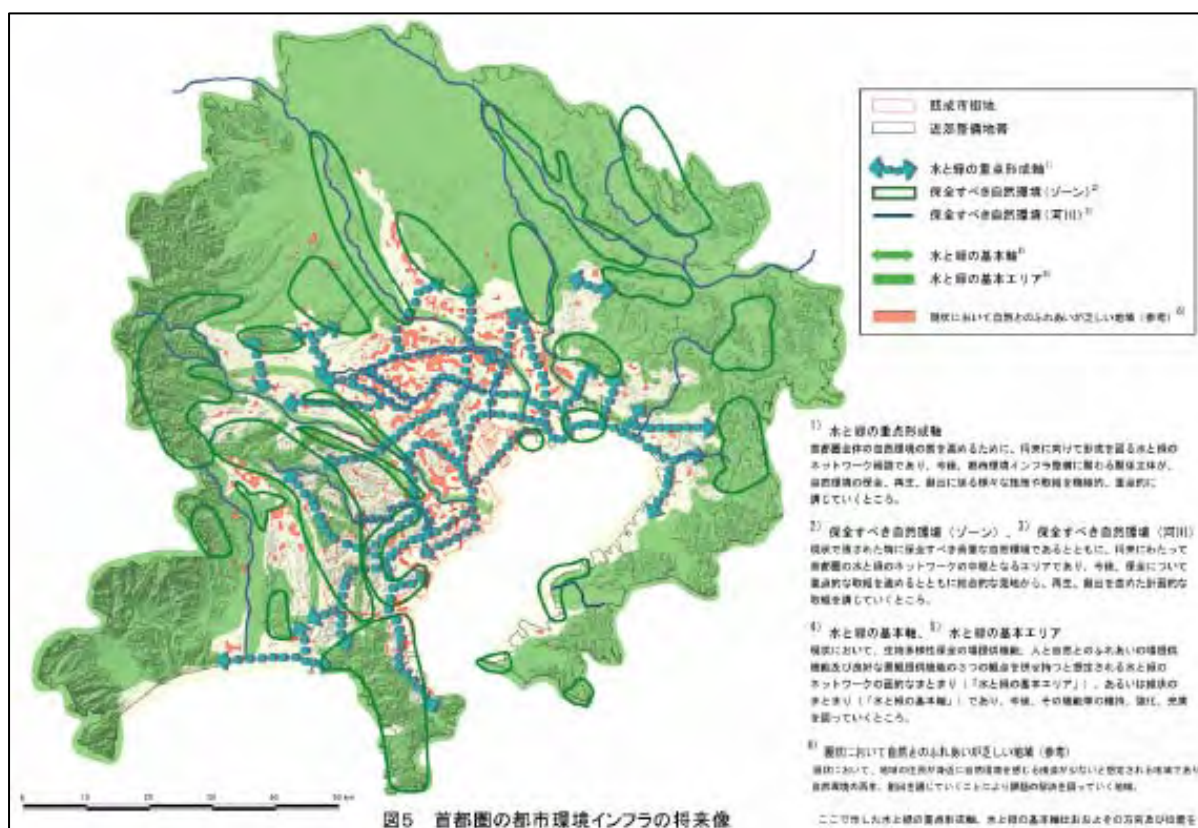
(1) 首都圏レベルでの将来像

- ・平成16年3月、関係3省9都県市より構成される協議会により、首都圏レベルにおける水と緑等の将来像として、「首都圏の都市環境インフラのグランドデザイン」が策定された。
- ・ここでは、水・緑を大都市の生活質向上のための都市環境改善に資する都市環境インフラの重要な要素として捉え、その保全・再生・創出のためにネットワーク化の重要性を大きな柱として方向づけている。
- ・また、将来像における重要な拠点として、丘陵・河川軸を中心に、「保全すべき自然環境」が位置づけられており、モデル3地区はいずれも、これらのゾーンに含まれている要諦の位置にある。

■「保全すべき自然環境」の定義

現状で残された特に保全すべき貴重な自然環境であるとともに、将来にわたって首都圏の水と緑のネットワークの中核となるエリアであり、今後、保全について重点的な取組をすすめるとともに総合的な見地から、再生、創出を含めた計画的な取組を講じていくところ

■首都圏の都市環境インフラの将来像

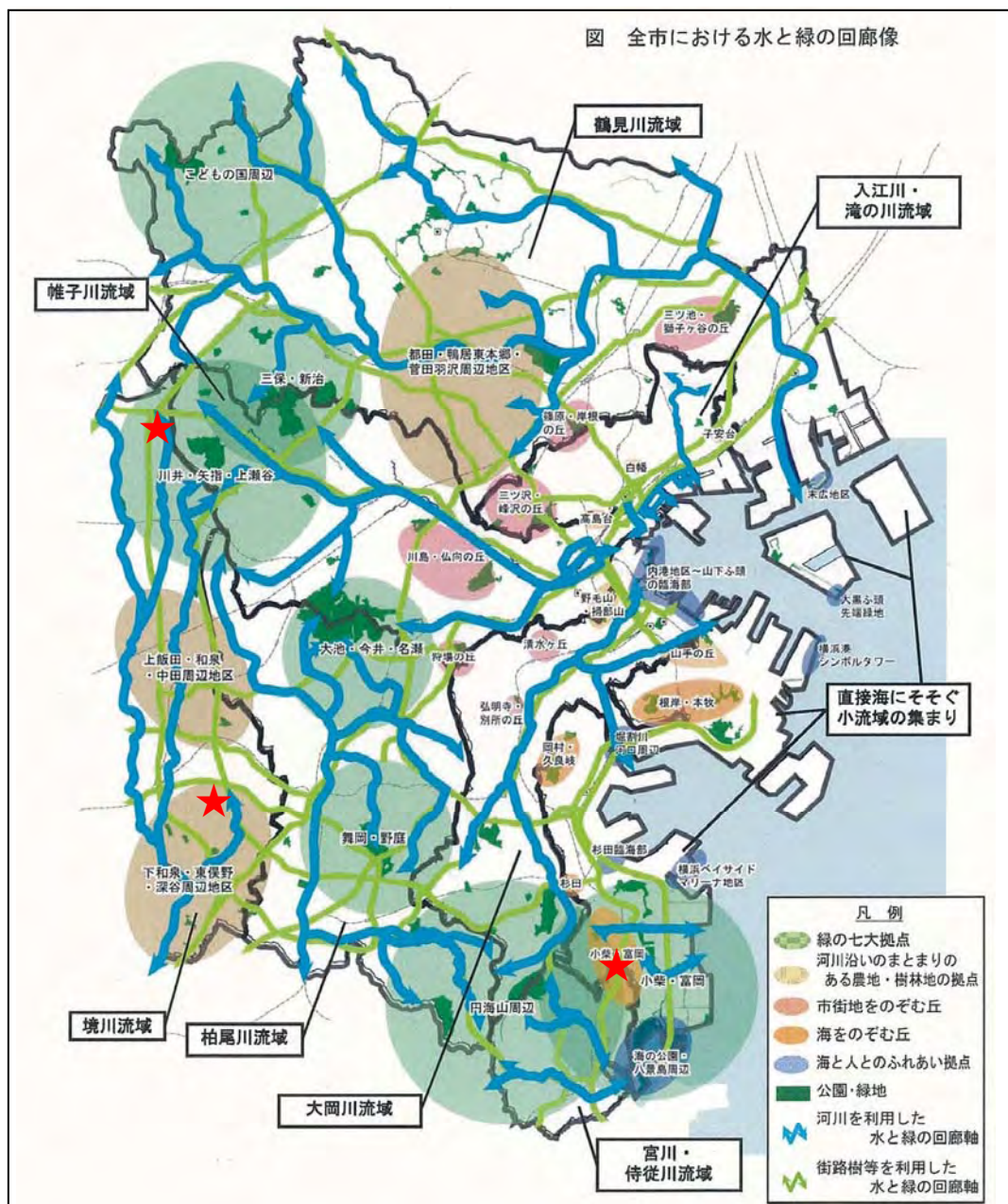


出典：「首都圏の都市環境インフラのグランドデザイン」（平成16年3月、
自然環境の総点検に関する協議会）

(2) 横浜市における将来像

- ・今年度改定された「横浜市水と緑の基本計画」（平成 18 年 12 月）においては、下図のような「水と緑の回廊」形成が目指されている。
- ・モデル 3 地区はいずれも下記のような回廊形成上位置づけられた「拠点」に含まれ、緑の拠点としての「保全」の必要性・意義が明確に位置づけられている。
 - ※ 上瀬谷・小柴 ：「緑の七大拠点」に含まれる要諦に位置
 - ※ 深谷 ：今回改定で新たに設定された「河川沿いのまとまりのある農地・樹林地の拠点」の源流域の要諦に位置
- ・また今回の改定では、水と緑を一体的に捉えた流域単位での計画展開が大きな柱とされ、新しい時代の要請に適合したあり方が示された点が特記される。

■横浜市における「水と緑の回廊像」



(3) 水・緑の保全・活用に向けての課題

1) 水・緑の環境再生への課題

- ・今後広域的な観点から水・緑等環境資源の保全・活用を進めていくためには、『ノーネットロス』の理念のもと、地球環境・健全な水循環の回復、生物多様性の保全、ヒートアイランドの抑制等水と緑に要請される今日的な意義を十分念頭に置きつつ、次のような視点から検討していくことが重要な課題である。

①拠点的功能の維持・増進

- ・大規模な緑地が果たしている各種環境機能を維持、増進
- ・特に大規模空地の持つ貴重な資質を生かし拠点的功能の創出

②水・緑の連続性の確保、エコロジカル・ネットワークの形成

- ・分断・断片・孤立化しつつある緑の連続性を回復
- ・地域の自然的、歴史文化的な痕跡（崖線・水路・社寺仏閣等）を手がかりとしたネットワークの再生
- ・沖積低地等防災上脆弱な地域における戦略的な水・緑への回復 等

③水・緑による都市居住環境形成への波及効果の発揮

- ・上記を通じた周辺市街地における快適な居住環境再整備への誘導 等

④水・緑の永続性の確保・補強

- ・持続的な環境の担保に繋がる水・緑の永続性を確保・補強 等

⑤パートナーシップによる水・緑の適切なマネジメントの達成

- ・広域的な水・緑を維持管理していくための広域的な水・緑のマネジメントシステムの構築 等

2) 境川流域再生軸（仮称）の戦略的重要性

- ・首都圏南西部地域においては、このような観点から保全・活用を進めるうえで、特に『境川流域の戦略的な重要性』が高いと考えられる。
- ・周辺の鶴見川流域やイルカ丘陵、また相模川流域では、それぞれ関係自治体や住民団体等が協働して水・緑を中心とした広域的な地域環境形成に向けての取り組みが行われてきているが、それらには含まれた「境川流域」は、文字通り都県や市町村の境界領域に位置することにもより、流域圏域としての一体的な地域環境形成の熟度が低いものと思われる。
- ・モデル地区のうち2地区が含まれるこの境川流域圏を、イルカ丘陵軸と連動させた『都市環境再生軸』として捉え、ここでの先行的な取り組みを、首都圏南西部における環境再生へと、広域波及させていくことが効果的ではないかと考えられる。
- ・以上のような視点も念頭に置きつつ、次章の各モデル地区における検討を行うこととする。

